

「福音の礎（いしづえ）」

2022年7月10日

ローマの信徒への手紙9：6～18

コリントの信徒への手紙一1：18～21

佐々木 佐余子

今朝七里教会が35周年を迎えたこと本当にうれしいです。私は今も覚えています、開拓伝道しているお家に上がると、和室の礼拝堂に真っ赤なベルベットのカーテンが降ろされ、十字架が縫い付けられておりました。その赤は燃える柴を現しているのではないのかとピンとききました。出エジプト記3章にありますように、モーセが神の山ホレブに来た時、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れたのです。モーセを見ると柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きません。神は言われました、「モーセよ、モーセよ」「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」と言われたのです。赤いベルベットのカーテンは燃え尽きない柴を現しているのだと思いました。そして新会堂の説教壇はスリッパを脱いで上がるのです。とても珍しいと思いました。でもそこは聖なるところなのです。

私がどうして35周年の説教を担当することになったかと言いますと、今の七里教会の中で、わたしが二番目の古株だからなのです。それでここに立たせていただいているのだと思います。配られている沿革を見ると、私がここに伝道師として着任した年は、1994年3月なので、それ以前のことは知らないのです。七里福音集会は教会の前身にこういう時代もあったのですね、と言う心境ですし、伝道所開設記念日で鈴木一義教区議長が見えられて、七里伝道所の開設式があったことは知りませんでした。

この年表を見て思うことは、この七里の伝道は神さまのご計画だったのだとはっきり思います。でなければ、なぜずっと続いたのでしょうか、この35年間多くの試練がありました。どん底の時もあったでしょう。でもその都度持ち直して今まで来れたのです。これは聖霊が先だって歩いてくださったからではないでしょうか。聖書には、神の選びがあることを教えています。ローマの信徒への手紙9章11～15節にこうあります。「その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、『兄は弟に仕えるであろう』とリベカに告げられました。それは、自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、お召しになる方によって進められるためでした。『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてあるとおりです。では、どういうことになるのか。神に不義があるのか。決してそうではない。神はモーセに、『わたしは自分が憐れもうと思う者を憐み、慈しもうと思う者を慈しむ』と言っておられます」と聖書にある通り神の選びは人間にはわからないのです。エサウはエルサレムから遠く離れたモアブの地、辺りに住むようになり、イスラエルの歴史からはずれました。一方ヤコブから12部族が生まれ、やがてダビデ王やソロモン王が輩出し国は大いに栄えました。そして約500年間続きました。これってすごくないですか。あの小さな国がですよ、資源も乏しくて周囲に大国がにらみを利かせている中で、勿論アッシリアや

バビロンに敗戦し囚われの民族にはなりましたが、神は憐れんでペルシャの時代、夢にまで見たイスラエルに帰還させてくださったのです。ユダヤ民族は信仰の目が覚めてエルサレムに神殿を造ろうと尽力しました。途中邪魔をする者たちもいたけれど、ペルシャの王キュロス、ダレイオス、アルタクセルクセスの命令によって建築を完成させたのでした。ここもまた驚きです。異邦人、それはユダヤ人が軽蔑していた異民族バルバロイを用いて神は、ユダヤ人の歴史をつないでくださったのです。あの恐ろしいアッシリアは約 300 年でバビロンに滅ぼされました。そしてバビロンもたったの 70 年でペルシャに滅ぼされてしまいました。ペルシャの王はイスラエルに恩恵を与えました。ですからペルシャの王キュロスはメシアだとユダヤ人から呼ばれていたのです。

パウロは言っています。神の選びに不義はない、と。人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものだ、とはっきり断定しています。神は七里教会を憐れんでくださいました。この地に福音の礎をおいてくださったのです。この沿革を見ると、1986 年 9 月に礼拝出席者は 15 名になると書かれております。この数字すごいですね。15 名ですよ。新堤に移転してから 7 年で 15 名の人々が礼拝に出席しているのです。何回計算しても 7 年です。これは多分私が思うに、『婦人の友』と言う雑誌があって、友の会に風間トモ子さんが入会され、それで藤野さんや早野さんを伝道所に導かれたのだと思うのです。そのお二人が役員になりとても良いお働きをされました。1987 年に洗礼を受けられています。そういうことを思い出します。また佐藤一さんも導かれ役員として務められました。そして翌年伝道所が発足したのです。そして 15 年後に第 2 種教会が設立されました。1987 年から 15 年後、2002 年に小石川白山教会の総会において「七里教会設立」が決議されています。私はこの小石川白山教会も聖霊を豊かに与えられている教会だと感じます。風間先生ご夫妻は小石川白山教会出身ですので、開拓伝道をしたと思って親教会を頼ることはあることですが、大体は嫌がる教会が多いのです。それは言わなくてもおわかりでしょうけど。おそらく小石川白山教会も躊躇したでしょう。いろいろな意見があり揺れたでしょう。いくら大教会と言っても事情があるのですから。そう簡単に「いいですよ」にはならないのです。それで、時々役員さんたちがお見えになりました。どうやらお断りするために見えた節もあります。でもある女性の役員さんがこう言われたのです。「私たちは断るために来たけれど、礼拝するところのカーペットをめくったら、ざらざらした古ぼけた畳が見えた。それを見た時、断る勇気はなくなった」と聞きました。神さまは憐れんでくださったのです。「わたしは自分が憐れもうと思う者を憐み、慈しもうと思う者を慈しむ」(ローマの信徒への手紙 9:15) 神なのです。それ以来、時々見えて、お祈りしてくださり献金も奉げてくださいました。そればかりではありません。この間、ある方からお電話があり、その方は親教会の役員さんだと思いますが、宗教法人のことで面談したいと言われました。その方が言われるのは 2011 年、今から 10 年前に土地の譲渡証書を作成してあるからその件で話がしたいということでした。もう驚きました。約束を反故にしないで実行しようとしているのです。私はこのみ言葉を思い出しました。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへいっても、わたしはあなたを

守る。わたしは決して見捨てない」(創世記 28:15) 一人の使者を通して神のメッセージが届けられました。小石川白山教会は昔、藤田昌直先生が40年間牧会されており、日本聖書神学校の教授でもあられたのですが、私も教えていただきました。何かつながりのようなものを感じます。藤田先生は礼拝学、宣教学の先生でした。今ノートを見ると、大変高度な授業だと思います。聖餐式や幼児洗礼の授業でした。このように書かれていました。今までは福音を述べていればよかったが、これからはどのように述べたらいいのか、考えるようになった。日本人のメンタリティー精神性をよく考えて伝えなければならない、と書かれていました。日本人の宗教観・信仰観をよく考えてどのように伝えたらいいのか、難しいところです。小石川白山教会は福音教会の流れで、元々ドイツの移民がアメリカに移住してそこで始められたとあります。後にメソジスト教会と合同しています。それで、昔祈禱会で聖歌を使用していたのだと思いました。

さて、教会は何を宣べ伝えるのか。それは「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(コリントの信徒への手紙一 1:18) とあるように十字架の信仰ですね。昔、ここではない他所の教会の玄関に立っていた時のこと、その日は町のお祭りの日でした。ぞろぞろと人々が歩いていました。その時、ある青年が私の顔を見て言ったのです。「僕はこういう人の気持ちがわからないんだー」きっと私を教会の人だと思ったのでしょう。「キリストを信じている人がわからないんだよー」、と言ったのでしょう。でも口に出して言ってくれて良かったです。普通は黙って通りすぎるでしょうに。そうなのか、わたしたちのことがわからないのか。どうやってわかるように話をしたらいいのだろうか、と思いました。いきなり十字架の言葉のお話をしてもお分かりにならないでしょうに、日本人の信仰観や宗教観をよく学んで伝えるには難しいと思いました。でも学んで理解してもそれは知識なので、信仰とはならないのではないかな。あくまでも求道する心が必要だと思います。ある方が祈禱会でこう言われました。「私は聖書を読んでもわからないし、説教を聞いてもずっとわからないことが多い。でもどういいうわけか教会に来ている」と言われました。それはまさに神の招きではないでしょうか。牧師も聖書が100%完全にわかるのではないのです。「コヘレトの言葉」を今聖研で学んでいるのですが、時々質問を受けるのです。「これはどういう意味ですか」。ドキッと一生懸命考えて話しますが、まあどうにか話をしますが、全部はわかりません。人間一生求道者ではないでしょうか。

さて、福音の礎は十字架の言葉です。この礎の上に教会が建てられます。礎とは石据えのことです。石据えとは建物が腐らないように柱の下に土台を置くための石のことですね。この辺は風間先生にお聞きした方がわかるのですが、この石据えがないと基礎が固まらないので大事な意味の言葉として使われるのだそうです。使徒ペトロは言います。「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい」(ペトロの手紙一 2:5) と勧めます。この石はいろいろな石が使われるそうです。昔、大宮のソニックで関東教区の総会があった時、開会礼拝である先生が興味深いお話をされてました。その先生は何でも建築のお仕事をしていた人で、屋根の瓦を載せる時、隙間がどうしても出来てそ

こにぴったりはまる瓦を捜すのだそうです。いびつな形の瓦があって隙間にはめるとぴったりとする場合もあるそうです。ですからそれと同じように小さな石でも不揃いの石でもいびつでも石据えにはいい石もあるのだ。教会も同じではないか。神はどういう人でも教会に招いてくださる、と言われました。実に奥の深い感慨深いお説教でした。なるほどと思いました。今でも思い出します。そして礼拝の中で一番の中心は信仰告白ではないでしょうか。今はコロナのため省かれている教会が多いと思いますが、七里の開拓時代の頃、主日礼拝は日本基督教団の信仰告白を全文毎週唱和していました。それもよく響く大きな声で告白していました。あの気構えは「これから伝道するぞ」と言う宣言のように聞こえました。そしてまた賛美が重要ですね。讃美歌を歌わない礼拝はないと思います。神さまの愛に応答して賛美するのです。そして頂点は説教です。ラクダにはひとこぶラクダとふたこぶラクダといふらしいのですが、ひとこぶラクダは説教重視の礼拝です。ふたこぶは説教と聖礼典（洗礼式・バプテスマと聖餐式）のある礼拝です。どちらの礼拝も大事です。そして、神のみ心を知る場として教会役員会や教会総会があります。教会は主イエス・キリストのみ体です。では主イエス・キリストのみ体はどのようにしてわかるのでしょうか。ある人は言います。主イエス・キリストのみ体は牧師の信仰や意見、考え方だと言う人もいるでしょう。それが一番危険なのです。そうなると会社のワンマン社長と同じになるのです。その会社ではすぐ倒産するでしょう。なぜなら一人の考えは狭くなり多くの事柄に対処できないからです。ですから役員会を開いて大事な考え、意見を聞きます。昔イギリスの映画「エリザベス」を見ました。その女王はたくさんの閣下を呼んで、一人一人意見を聞くのです。戦争の状況の場合、今進軍したらどうか、海路で行くか、陸路で行くか議論を戦わせて女王は策を練ります。そして最後に命令をくだします。勝っても負けてもその責任は女王がとるのです。そのやり方を見てこういうのはいいと思いました。閣下の中には知恵者もいるし、軍隊に強い者もいるし、戦況を見るにたけている者もいるし、財政に強い者もいるし、女では出来ない様々な才能を持つ者がいることを女王は知っているのです。このようにしてエリザベスは長期に安定政権を保ちました。教会も同じではないでしょうか。役員さん4人おられるけれど、お一人お一人個性があるし、才能もそれぞれで性格も様々で意見もはっきり言います。でもお互い尊敬しあって支えあってしているように見受けられます。そしてこの教会の一番いいところは弱い人を大事にしているところですね。教会だからどこでもそうでしょうと思われるかもしれないけれど、それが案外違うのです。教会によってはそっけないところもあるようです。それは何といても先代の風間先生ご夫妻の残された遺産かも知れません。そして、最後に日本基督教団の教憲教規を大事にして、それに則ってことを図ることが大事ですね。それは七里では守られているようです。「十字架の言葉は、減んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力」なのです。これから創立40周年に向かってどのような歩み出しがあるのでしょうか。神さまはどのような手を打ってくださるのでしょうか。楽しみですね。